

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.16 トーテムポール

2023（令和5）年3月下旬、満開の桜を目当てに花見客でごった返す上野公園を訪れた。トーテムポールを見るために（図1と2）。作者は三坂耿一郎（みさか・こういちろう＝1908－1995）。三坂は、東京美術学校（東京芸術大学の前身）を卒業した彫刻家で、戦後は小野田セメントが後援した野外彫刻展にセメント彫刻をたびたび出品したことで知られる。高さ7m、翼の長さ4m、主軸のポールはフクロウ、キリン、ワニ、ゾウ、サルなどの動物が上下に積み上がっている。おそらく上野動物園で飼育されている動物がモチーフだろう。ポールの頭頂部はライオン。これはライオンズクラブの象徴である。ポールを支える台座には、ライオンズクラブのモットー「We Serve（我々は奉仕する）」を刻んだ銘板が備わる。

ちなみにライオンズクラブとは、1917（大正6）年に米国で設立された世界最大の国際的社会奉仕団体で、名称のライオンズ（LIONS）とはそのスローガンである”Liberty, Intelligence, Our Nation’s Safety”（自由を守り、知性を重んじ、われわれの国の安全をはかる）のそれぞれの語（句）の頭文字からとられている。

トーテムポール脇に立つ説明板はいう。「このトーテムポールは我々上野ライオンズクラブの会員が手に手を取りあつてつくりあげたものである」。まさに私が上野公園を訪れた日の59年前、1964（昭和39）年3月23日にこのトーテムポールは、東京上野ライオンズクラブによって建立されたのである。さらに説明は続く。「都民の憩いの場である上野恩賜公園に緑の森と動物と人間生活の結びつきを強調し交通標として都民の平和と繁栄を願つてここに恒久的な鉄筋コンクリート造りのトーテムポールの建立を見たのである」。

ここで気になるのは「恒久的な鉄筋コンクリート造り」の文言である。トーテムポールの長期的な存続を目的に、鉄筋コンクリート構造が選択されたという意味だろう。ここでコンクリートと木材との関係に目を転じると、興味深い事象が浮かび上がってくる。

もともとトーテムポールとは、カナダを中心とした北米大陸の太平洋側に居住する先住民が作る柱状の木造彫刻の総称である。その目的は、みずからの出自、家系に関わる紋章、業績、出来事などを記録して後世に伝えることにある。その材料として、柔らかくて加工しやすいレッドシダーが好まれた。

こうしたトーテムポールは、筆者が通った小学校にもあった。卒業記念として建てられたものだ。そもそも北米由来のトーテムポールがなぜ日本に存在するのか。諸説あるが、その一つにコンクリート電柱説がある。かつての日本の電柱は木製のものが一般的だったが、昭和30年代ごろからその主流がコンクリート製のそれにとって代われ、木製の電柱が大量に廃棄されることになった。この廃電柱の再利用方法として、日本でトーテムポールが誕生し

たといわれている。ただしその学術的真偽は不明で、真実はよくわかっていない。たしかに日本の木製電柱は、木材防腐特別措置法（昭和28年法律第112号）によって、「特定の用途に使用する木材に適正な防腐の措置を施すことを促進することによって、木材の消費の節約に寄与することを目的とする」と定められ、木製の電柱が姿を消していった経緯がある。

そもそも北米の先住民にとってのトーテムポールは、建立することそれ自体に意義があり、その長期保存や修復には頓着しなかった。それゆえに自然の成り行きにまかせ、トーテムポールは朽ち果てるがままにその地に返すものとされた。先住民は自然の摂理に抗うことはしなかったのである。

しかし逆に上野公園のトーテムポールでは、「恒久的な鉄筋コンクリート造り」が選択され、朽ちやすい木材は忌避された。たしかに記念碑としての長期的な存続を目的に、コンクリートのような堅牢な素材を選ぶのは理にかなっている。その物理的堅牢性で経年劣化に対抗するのだ。

これと逆転の発想もある。あえて木材のような朽ちやすい材料で記念碑を作り、定期的に作り直すことで、記念すべき事績を改めて想起するやり方だ。それが「3.11復興木碑設置プロジェクト」（岩手県大槌町）である。木製の碑すなわち木碑を4年ごとに建て替え、震災の記憶を更新・継承するということころみである。いわば震災モニュメントの式年遷宮だ。

上野公園のトーテムポールを通して人間に宿る記憶の想起や継承方法について考えた。



図1 トーテムポール全景



図2 トーテムポールの上部